

# Fate/Broken Hero

後菊院

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

捻じ曲げられた運命の顛末。

# 目次

第一話(仮)	B e f o r e m y b o
第二話(仮)	L O S E R
	30



## 第一話(仮) Before my body is d

r y

0

僕の思い通りになったら許さないからね？

——墮落王

1

コツコツと無機質な複数の足音がカルデアの廊下に響く。外界を覗く窓は左右のどちらにも存在せず、薄暗い。特段、カルデアが電力危機に陥っているというわけでもないのだが、この廊下には不吉な空気が溜まっている。

向かう先はカルデアの監獄室。トレーニングルームや居住区画から離れた場所に設置されている。サーヴァントや職員でもここに来ることはほとんどない。今この道を

歩いている彼らは、久方ぶりの来客だった。

「……本当にこんなところにいるのか」

先陣を切って歩く——しかしその割にはこの廊下の雰囲気には怯えた様子を隠さない恰幅の良い金髪の男性が、少し後方を歩く女性——レオナルド・ダ・ヴィンチの絵画、「モナリザ」がそのまま現実世界に飛び出てきたような絶世の美女に尋ねる。

「うん。彼女はこの先にいる」

少しも笑わずモナリザは言った。その答えには妙な迫力があつた。金髪の男性はごくりと唾を飲み込む。歩調が少し遅くなる。

「どうしたんですかカルデア新所長。こんな時こそご自身の勇氣を見せつけるチャンスですよ」

モナリザの後方を歩く、眼鏡をかけたピンク髪の女性が媚びた声で金髪の男性に話しかける。あからさま馬鹿にしていたが、緊張の極致にある金髪の男性にとってはそんな言葉でも救いになつたらしく、「う、うむ。そうだな」と何度も頷く。

だがそれ以上減速こそしないものの、元の速さには戻らない。

「さつきも話したし報告書にも書いたけれど、彼女は精神が非常に不安定だ。ここに収容されてから、カルデアの人間及びサーヴァントが彼女とのコミュニケーションに成功したことはない——会話自体は成立するけど、まともな会話は望めない。それでも良い

のかい？」

金髪の男性の隣に進み、歩調を合わせながらモナリザは彼の顔を窺う。怯えているのは簡単にわかった。「ううむ……」と唸り、一度歩みを止めかける彼だったが、ぶるぶると首を横に振り、闇に包まれた廊下の前方を睨む。

「いやー、彼女とは一度話をしなければならぬ——話をしようとしたと私が努力した記録は残さねばなるまい。正気を喪っているとは言え、所長がマスターと一度も顔を合わせないというのは無しだ」

今度は思い切り歩調を速める。もはや半ば走っていた。「私に続け〜」と、特攻隊長のようなセリフを叫びながら。その場を歩く誰一人として、自身のあとを追って来ないのを確認する余裕はなさそうだ。

モナリザはやれやれとため息を吐く。

「臆病なのか勇敢なのかわからない人だね」

「臆病なだけですよ……。自分が勇敢でない事実を直視するのが怖いだけ」

先ほど猫などで声を出していたピンク髪の女性は辛辣な毒を吐く。彼に毛ほども魅力を感じていないのは明白だった。

ピンク髪の女性の後には三名の兵士。見るからに手練れ。無機質で陰鬱なこの廊下が、これ以上なく似合っている者どもだとモナリザは思う。

「彼らに出番が回ってくるような事態はこの先にあります?」

モナリザの視線を咎めたピンク髪の女性が聞いてくる。「無いよ。彼女は嚴重に拘束されている。暴れ出した彼女を取り押さえるなんてシナリオは万が一程度の可能性しかない」

「万が一はあるのですね」

「可能性の話さ」

その時は頼りにしているよ——と、モナリザは心にもないことを言う。

「その場合は生け捕りがお望みですか?」

ピンク髪の女性の問いにモナリザは沈黙する。僅かなタイムラグの後、彼女は「——

いや」と答えた。

「生死は問わない」

彼女は何かを諦めたような顔をしていた。

2

暗がりの奥——強化ガラスで隔たれた向こう側にそれは居た。

モナリザの女性——レオナルド・ダ・ヴィンチの言う通り、藤丸立香はカルデア最奥

部の牢で拘束されていた。

そこはカルデア唯一の独居牢である。立香は無機質な部屋の中央に備え付けられた柱に、数十年前の精神病院にでもありそうな拘束衣を着せられて縛りつけられている。頭部も固定され、口には枷が嵌められていた。唯一自由に動く眼球が、強化ガラスの対岸で唾然とした表情を晒している金髪の男性、ゴールドルフ・ムジークに向けられる。その瞳は深淵のように——或いは虚無のように暗く深い。十代の少女が持つて良いものではなかった。ただ視線を向けられただけなのに、ゴールドルフは強化ガラスから二歩あらずさる。

「藤丸君、こちらカルデアの新所長、ゴールドルフ・ムジーク所長だ。ゴールドルフ所長、こちら藤丸立香。人類を救ったカルデアのマスター」

レオナルドが事務的な口調でお互いを紹介する。ということとは、声は聞こえているらしい。どこかに通気口があるのだろうか。それともマイクか何かがあるのか？

暗がりの中で強化ガラスの向こう側に立つ者達を順番に観察しているのがわかる。我々を見て何を思っている——何を考えているのだろうか。全くわからない。

「新所長」

レオナルドに役職名を呼ばれてゴールドルフははつとすする。振り返るとレオナルドとピンク髪の女性——コヤンスカヤがこちらに視線を送っていた。ゴールドルフはおほん

と咳払いをし、精一杯の威厳を出そうと胸を張る。

「お前がリツカ・フジマルだな——……。……。……。その、何だ、その……。ちよ、ちよ、ちよ、調子はどうか」

ぷつとコヤンスカヤが吹き出す。が、ゴルドルフにそれを咎める余裕なんてなかった。目の前の彼女と相對するだけでゴルドルフの精神はいっぱいいっぱいだった。自分でも今はまずかつたなと思うが、後悔先に立たず。このまま突っ走るしかない。

「調子はどうか」って。

親戚の叔父さんかよ。

立香からのリアクションは無い。彼女はじつとこちらを見続けているだけだった。そういえば、そもそも彼女は何らかのリアクションをとれるのだろうか。あんな雁字搦めの拘束衣とボールギャグで動けるわけないよな……。食事や排泄はどうしているのだろうか。

と、現実逃避気味に彼女の生活についての考察を始めたゴルドルフの耳に「こんにち。調子は良いです」と少女の声が聞こえた。一瞬何が何だかわからず辺りを見回す。音の出どころは強化ガラスの上部に取り付けられたスピーカーのようだった。何で？ どうして？ とパニックになりかけたが、思念会話の応用だというレオナルドの説明を受けて納得する。

そうか。

今のは彼女の声だったのか。

意外に理性的じゃないか。

「初めましてだな。私はゴールドルフ・ムジーク。今日からこの所長となった」

声が上がらないよう最大限注意しながら言葉を紡ぐ。彼がビビっていることは彼の全身が雄弁に物語っているのだが、ゴールドルフ本人は至って真面目に所長の威厳を見せようとしていた。

「そうですか。おめでとうございます」

えらく空虚な台詞だった。この思念会話は感情を表現する機能がないのだろうか。

「既に聞いているだろうが、私がここへ来たのを以てお前は正式にカルデアから除名されることになっている。つまりお前はもうまもなく処分されるのだ。そのことについて何か申し開きはあるか？」

処分。

物騒な響きを持つ言葉だが、しかしそれは必ずしも立香の殺処分だけを指し示すものではない。この後ゴールドルフは彼女に記憶処理を施して民間に帰すつもりでいた。彼女の変異は魔術を原因としたものではない。であれば記憶をまるごと取り払ってしまったら、彼女は元通りの健全な少女に戻る筈。殺すこともできるが、記憶処理程度の手間



断言した。

予言じみた台詞——しかし、彼女にそんな能力は備わっていない筈だ。報告書にも無かった。それなのにも関わらず、彼女の言葉には一笑に伏すのを制する奇妙な説得力が存在した。

「……」

「いただいた資料とはだいぶ違っておりませぬ」

コヤンスカヤが呟いた。ゴルドルフも同感だった。藤丸立香のプロファイルにはしっかりと目を通したが、目の前の彼女があたの資料に載っていた少女だとは思えなかった。快活そうな雰囲気の顔写真——同じ顔だと言われればそうなのだが、別人が整形でもしているのではないかと疑いたくなる。

資料は十分読み込んだつもりだったが……一人の人間が、短期間に、これほどまで豹変することなんてあるのか？

「大事なものは認めることです」

彼女は言う。

「俺は『英雄』です。彼はそれを教えてくれた。何をやっても何処まで行っても英雄は英雄。人間に憧れるのはやめました」

——人間のふりをするのもやめました。

「……だつたらせめて英雄らしくしてくれ」

ダ・ヴィンチが疲れた声で頼んだ。

ゴルドルフは報告書の内容を思い出す——セイレムから帰還した藤丸立香がカルデアでやったことを。

空々空と名乗っていたサーヴァントがカルデアの敵対勢力であると知らされた藤丸立香は、三画の令呪を全て消費し百の貌のハサン、クー・フーリン、メフィストフェレスにカルデア内での「殺戮」及び「破壊行為」を強制させた。それによつて重傷を負つた職員は三名、殉職した職員は十五名。消滅したサーヴァントは五騎(操られた三騎のサーヴァントを含む)。鎮圧された後も彼女は抵抗を続け、ダ・ヴィンチやアンデルセンによる精神治療も効果を上げず、最終的にカルデアの新職員たちに職務を引き継ぐまでの間、この場所へ収監されることになった。それから毎日サーヴァント達がひっきりなしで面会しに来ていたが、誰も彼女の回復に貢献することはなかった。

立香は堕ちた。

それがカルデアの職員とサーヴァントの下した結論だった。彼女はあの少年に魅入られた。きつともう二度と戻つては来ない。人類を救つたマスターは正気でなくなつてしまったのだ。

「してるじゃないですか。俺はいつだってあなたがたの英雄ですよ——」

「今の君のどこが英雄だ！」レオナルドは憤然と言い放つ。だが彼女の表情は、身体中を切り刻まれていくかのように辛そうだった。

スピーカーからは「ははは」という乾いた笑いだけが響く。

「すみません、嘘をつきました。俺にあなたがたを守ろうなんて意志はありません。俺の尽くすべき相手は一人だけですから」

「……」

「ああ、早く会いたいなあ。愛し合いたいなあ。ねえダ・ヴィンチちゃん、その時はどんな服を着ていけば良いと思います？」

立香は視線をレオナルドに向ける。レオナルドはその視線を真つ向から受けるが――濁りきった暗い瞳に耐えられず、やがて俯いた。

## 3

あの少年さえ召喚していなければ。

ダ・ヴィンチは暗い個室の寝台に腰掛けて考える。今更どうしようもないことで、何をどうしたって現実を変えることはできないのだが、それでもこう暇だと思いがそちらに寄ってしまう。空々空と名乗ってカルデアに潜り込んだ偽の英雄、串中弔士。あの少

年さえカルデアに入れていなければこんなザマにはならなかったのではないか。

現在はゴルドルフ・ムジーク新所長の主導による現カルデア職員への取り調べが行われていた。数日かけて行われる尋問作業の間、職員たちは適当な「鍵付きの部屋」をあてがわれる。この扱いはゴルドルフ本人の方針だろうか、それとも彼の隣にいた女性の提言か。或いはあの胡散臭い神父の入れ知恵か。三人のうちの誰かの発想だとは思いますが、一人に断定することはできなかつた。

「こんなことをしている場合ではないんだけれどな」

呟いてみる。ダ・ヴィンチのいる部屋は一人部屋だ。傍には誰もいない。当然、それに対する反応も零だつた。

十三会談と名乗る集団——彼らの素性は調べられるだけ調べてみたが、カルデアの諜報能力では成果がほとんどあがらなかつた。当然、未だに具体的な対策をたてられていない。

一里塚木の実、詳細不明。

右下るれるろ、詳細不明。

滯標高海、殺し屋。詳細不明。

滯標深空、殺し屋。詳細不明。

真庭喰鮫、詳細不明。

萩原子荻、詳細不明。

ふれあい、詳細不明。

バゼット・フラガ・マクミレッツ、封印指定執行者。

青崎橙子、元冠位魔術師。現在封印指定。

間桐慎二、魔術師家系間桐の長男。

ラヴィニア・ウエイトリ、錬金術師。

串中弔士、詳細不明。

西東天、詳細不明。

この体たらくである。

ひと際目を引くのは青崎橙子とバゼット・フラガ・マクミレッツの二人だろう。単純なネームバリエーションもさることながら、封印指定を受けた魔術師と封印指定執行者が同じ組織にいるのは奇妙だ。バゼットが魔術協会を裏切ったと考えるのが一番自然だろうか。協会に問い合わせたところ、バゼットとは連絡がつかなくなっていることがわかった。

エミヤやメドゥーサ、それにドレイクは「間桐慎二」という名前に衝撃を受けていた。「間桐慎二」という男は魔術師として名が通っているのか？」と、エミヤは協会出身のカルデア職員に質問していた。知り合いなのだろうかと思いい話を聞いてみると、彼は困った

ように眉をひそめ、「同姓同名の別人の可能性の方がまだ高い」と言いつつも説明してくれた。冬木の御三家の一角——間桐が長男。しかし彼には魔術回路が無いという。つまりは一般人だ。人理保障機関の敵対勢力としては役者不足な気がする。

魔術世界以外の住人として一応の特定ができたのは濛標高海と濛標深空の二人のみ。殺し屋の双子らしい。

他の人物は全く調べがついていない。おそらくは棲んでいる世界の深度が違うのだろう。だから網にかからない。ダ・ヴィンチはそう推測している。

「キャスター、お前の番だ。来い」

ウインと扉が開き、ゴルドルフお抱えの兵士が姿を現した。ダ・ヴィンチは一度思考を打ち切り、ベッドから立ち上がる。先導する兵士についていくと、彼らを取り調べ室として使っている部屋に通された。

「レオナルド・ダ・ヴィンチ」

そこには一人の男がいた。彼は部屋の中央の机に備え付けられた椅子には座っておらず、入り口の横に立っていた。聖堂教会の者の風体——しかし聖職者にはまったくもって似つかわしくない、含んだ笑みをたたえている。

言峰綺礼。

ゴルドルフよりもコヤンスカヤよりも強く警戒しなければならぬ存在。素性を探

るまでもなく第一級の危険人物とわかる。この男が全ての黒幕だと言われてもダ・ヴィンチは全く驚かないだろう。

「……言峰」

「調子はいかがかな。あんな場所に閉じ込められてうんざりしているだろうが、今少し辛抱してほしい」

言峰は慇懃無礼な調子でダ・ヴィンチを出迎えた。「どうぞ、かけてくれ」とダ・ヴィンチに椅子を引く。胡散臭いことこの上なかつたが、断る理由は見つからず、ダ・ヴィンチは席に着いた。

「空白の一年に何があつたのか——大方の事情は把握している。君の報告書はとても読み易かつた。流石は万能の天才と言うべきだろう」

「学生じゃないんだ。レポートの出来を褒めても私からは何も出ないよ」

「出してもらわねば困る。君の報告書は素晴らしかつたが——難解すぎるのか簡単すぎるのか、私にはどうにも理解できない箇所があつた。そこについて幾つか質問をさせてもらおう」

変わらない笑みを浮かべながら言峰がそこまで喋つた時、ダ・ヴィンチの頭にあつたのは串中弔士と藤丸立香だつた。串中弔士が最後に姿を消した時の描写をダ・ヴィンチは詳しく書かなかつた。

正確には、書けなかったという方が正しい。彼は文字通り「消えた」のだ。おぎなりの怪奇小説のような表現になってしまいが、そう言う他ない。魔術的な痕跡も科学的な痕跡も残さず予兆も見せず、複数騎のサーヴァントに囲まれた状況で彼は見事な脱出劇を成し遂げて見せた。空間を切り取られたとでも言うほかない不可解な現象。

もう一つ、藤丸立香についてのレポートを想起したのには、そのレポートの不完全さを彼女が認めていたからだだった。ダ・ヴィンチの弱さがそこに発露していたのだ。彼女の変貌ぶりを——墮ちた立香を、ダ・ヴィンチは真に冷静な眼で観察することができなかった。可能な限り感情を排除して彼女を観察し、観察報告として仕上げたが、満足いくものができたとは思っていない。

だからその二点を突かれると思ったのだが、予想は外れていた。

### 「第六特異点」

言峰は言う。

「神聖円卓領域キャメロットにおける活動記録に少々不可解な点があった。特異点内のアトラス院を探索した時だ。報告書ではカルデアのマスターとマッシュ・キリエライトを含むそれまで行動を共にしていたサーヴァント達で施設内の機材を点検したとあるが、しかしこのメンバーでアトラス院の演算装置を点検できたのかね？ 施設に滞在した時間に鑑みても、専門知識を持った協力者の介添えがあったとする方が自然だと思ふの

だが」

「――」

この男。

表情を全く動かすことなく、しかし内面でダ・ヴィンチは苦く唇を噛む。言峰綺礼、やはりそういう存在か。万能の天才が信じて疑われない自身の直感通り、彼は最優先で対処すべき人物だ。

「――アトラスの機材は利便性にも優れている。彼らは使用者にパフォーマンスを左右されるようなものを作らない」

言峰は少しの間沈黙して手元の資料をばらばらと捲る。その後「なるほど」と、呆気なく身を引いた。却って不気味だった。もっと追及されるかと身構えていたダ・ヴィンチは肩透かしを食らった気分になる。

「もう一つ、亜種特異点、新宿における活動記録で、自然召喚されていたアヴェンジャー、エドモン・ダンテスに助けられたとあるが、この時の戦闘記録と報告書にある彼のスペックが一致しない。何が原因かね？」

「正式な契約を藤丸立香と交わしていない状態で戦闘に入ったのが原因だろう。彼は明晰な男だ。消滅を避けるため、魔力を節約して戦っていたと考えられる」

「同じく亜種特異点、地下世界アガルタでキャスター・シエヘラザードが聖杯の持ち主だ

と判断した時、報告ではレオナルド・ダ・ヴィンチ——君がシエヘラザードを名指ししたとあるが、これは事実か？」

「事実だ。あの時点では彼女以外に適する者がいなかった。もし私が思いつかなかったとしても、他の誰かが彼女を疑っていたらどう？」

言峰綺礼は微笑を絶やさないう。こいつ、本当は全て知っているんじゃないか？ 矢継ぎ早に繰り出される問答を処理しながら、並列してホームズの安否を確認する方法を模索する。直接彼の部屋に行くのはまずい。これがブラフだった場合、わざわざ彼らにホームズの居場所を喧伝するようなものだ。ならば秘匿通信？ 馬鹿な。カルデアのシステムは既に彼らに明け渡している。そんなものどこにもない。魔術を用いた思念通話？ 気取られるに決まっている。

「なるほど。質問は以上だ。協力感謝する」

そう言って言峰が向かいの椅子から立ち上がった後も、ダ・ヴィンチは油断できず彼の様子を窺っていた。まだ何かある。案の定というかなんとかいうか、「ああ、そう言えば君に一つ頼みたい仕事があるのだが」と、わざとらしく切り出してきた。

『Aチーム』のコフィンを解凍してほしい」

「オペレーション 無事 完了。 コフィン解凍が 終了しました」

「コフィン解凍まで あと3分 です」

長かった作業の終了を報せるアナウンスが響く。ついでダ・ヴィンチの後方からふわつはつはというゴルドルフの笑い声が聞こえてきた。

「見事だダ・ヴィンチ君！ 見直したぞ！ 我々が三日かけてできなかった事をひと晩でこなすとは！ これは君の処遇も考え直すべきかな？ これほど優秀な技師を失うのは惜しい」

調子の良い新所長からの賛辞を背中に浴びながら椅子から立ち上がるダ・ヴィンチ。短くため息をつく。ゴルドルフは彼女の左肩に手をおいた。

「カルデアの発電装置も扱いが難しいと報告があつたところだ。正直、理屈が分からない、と。君が私の秘書になるのならそれも解決だ。どうか？ 私は従順な者には寛容だぞ？」

ダ・ヴィンチは「それはどうも」とおさなりに礼を言いながらゴルドルフの手を払った。「謹んで辞退させてもらおう。私は以前のカルデアに興味があつただけだ。ゴルドルフ氏のカルデアにはなんの興味もない。今夜、カルデアのみんなと食事を済ませたらおとなしく退去するさ」

美女の冷やかな視線にあてられたゴルドルフは、一瞬その表情に恐怖を浮かべ、次いで怒りの形相を見せる。「ふん。そうか、可愛げのない！」そしてダ・ヴィンチを押し除けるようにして前に進み出で、Aチームが眠っているというコフィンの前に立つ。

「ええい、コフィンはまだ開かんのか！ 3分立つぞ！ いままで私を待たせる！」

作業を終えてコフィンの前で休んでいるカルデアの職員を叱咤した。「ああ、最優先はヴォーダイムだ！ 時計塔の至宝と言われた小僧だからな！ いの一番で目覚めさせ、この私が救ったのだと恩を売ってやるわ！ わはははははは！」

「はい、コフィン、開きます！」

職員の言葉と共に、コフィンが白い煙をあげて口を開ける。ゴルドルフは得意げな笑みを浮かべながら、白い煙が霧散してキラシユタリア・ヴォーダイムの顔が現れるのを待った。次第にあらわになるコフィンの中——だが、そこにゴルドルフの思い描いていた光景はなかった。

「え？」

職員が声をあげる。ダ・ヴィンチも通常より目を見開いてコフィンを見つめていた。ゴルドルフは困惑の表情のままぼかんと活動を停止する。

コフィンの中には誰もいなかったのだ。

「コフィンにキラシユタリア・ヴォーダイムの姿がありません！」

職員が見たままを報告する。「こちらもです！ コフィンB、C、D、E、F、G！  
どれも中に人は入っていません！」他のコフィンを調べ始めた職員が叫んだ。

「空っぽです！ さつきまで反応はあったのに、どうして!？」

「コフィンは開けてみるまで証明のなされない箱だ。中からの反応はいくらでも偽装で  
きる」

ダ・ヴィンチの明晰なる頭脳が目の前の謎に対して拘束で解答を算出し始める。――  
つまり、この四日間で、私より先にコフィンを開けて偽装したものがいる――？ だが、  
いったい誰が？ いやそもそも、どうやってヴォーダイムたちを――

ダ・ヴィンチの思考はそこで途切れた。

警報が鳴り響いたのだ。

《警告 警告 現時刻での観測結果に ■■■ 発生。 観測結果 過去に該当なし 統  
計による 対応、予報、予測が 困難です。 観測値に 異常が検知されません。 電  
磁波が 一切 検知 されません。 地球に飛来する 宇宙線が 検知されません。  
人工衛星からの映像 途絶 しました。 マウナケア天文台からの通信 ロスト。  
現在――地球上において 観測できる他天体は ありません》

「――なんだって?」

「な、なにが起きているのかねダ・ヴィンチ君!? ひ――ひいいい!？」

青い顔をしたゴルドルフが、さきほどより余裕の手でダ・ヴィンチの肩をつかんだ。「どどどど、どう言う事だ!? 私は何もしていないぞ!?」なのにどうして、カルデアスに亀裂が入っているのかね!?

彼は管制室の中央に鎮座する巨大な地球儀を指差して言った。

《擬似天球カルデアスに負荷がかかっています 観測レンズ シバ を停止 します》  
なおも警報が鳴る。「……今度はなんだ!?!」ゴルドルフはあちらこちらを忙しなく見回す。今度の彼の疑問には、職員の一人が答えを持ち合わせていた。

「――侵入者です! 正面ゲート、第三ゲート、第六ゲートに魔力感知!」

職員はしかし、眼前の計器を見て冷静さを失う。「なんだこれ……!?! 増える……どんどん増えていくぞ?!」

「ぼさつとしない!」

ダ・ヴィンチが職員を叱咤した。「シバは使えなくても通常の監視カメラがあるだろう! 正面ゲートとカルデア周辺の映像、出して!」

「あ――は、はい! 映像、出します!」

管制室の最も大きなモニターに光が灯る。そこには、カルデアを取り囲む黒い兵士たちの姿が映った。

「既に館内に侵入しています! 第三ゲートのシャッター、破壊されています!」

息つく暇なく第三ゲートの警備兵から通信が入る。「所属不明の敵から攻撃を受けている！ 至急応援求む！ クローバー隊は全滅、繰り返す、クロー——」

通信途絶。管制室の警備兵が胸元につけた機械をいじりながらゴルドルフに近寄る。

「閣下！ クローバー隊からの連絡、途絶！ 生体認証、返信ありません！」

ゴルドルフは青い顔をさらに青くした。

「何が起きているのだ……？ わた、私は聞いてないぞ、こんなことは！ コヤンスカヤ！ コヤンスカヤは何処にいった!?!」

立香のもとへ行った時、ゴルドルフの横に控えていたピンク髪の女性の名を呼ぶ。だが、彼女は管制室にはいない。ゴルドルフに応答する者は皆無だった。

またしてもアナウンスが流れる。

《全スタツフに到達。 全スタツフに到達。 正面ゲート他、館内すべてのゲート機能が停止しました。 館内から外部への移動は できません。 機能回復まで しばらくお待ちください》

「ゲートが制圧されたんだ……」

職員が震える声で呟いた。「どうするんだよ、これ……誰も逃げられないぞ……?」

「閣下!」

警備兵が再びゴルドルフに報告を入れる。「フラッシュフオーからの通信、途絶!」

如何いたします、閣下！」

ゴルドルフの顔色はいよいよ蒼白と化した。

「——そんな。私の兵隊たちが……全滅しただと……？」

## 5

楽な仕事だ。

不吉な廊下を歩きながら、コヤンスカヤはほくそ笑む。

カルデア襲撃といえば稀代の難行だったが、サーヴァントたちは軒並み退去済み。戦力らしい戦力といえばキャスト：レオナルド・ダ・ヴィンチとゴルドルフ・ムジークの私兵。その他多少の不確定要素はあるものの、ロシアの皇帝から借り受けた戦力にかかればそんなものは誤差に過ぎない。まさにローリスク・ハイリターン。コストは決して安くはないが、儲けが確約されている投資だ。

彼女は自身の前に複数の殺戮<sup>オブリチニキ</sup>猟兵を先行させ、悠然と歩を進めていた。目指しているのは最奥の独居房。藤丸立香の収容される檻だ。彼女の殺害も仕事の内。立香が死ねば、いよいよ完全に人類側の——否、汎人類史側の希望が断たれる。

「希望ねえ……」

コヤンスカヤはそう眩き、はははと嘲る笑いを漏らす。今の立香のどこが希望なのだろうと考え直し、可笑しくなってしまうのだ。正気を喪い、カルデアに牙を剥き、がらんじがらめに拘束された今の彼女に、ソロモンの魔神を討った頃の面影はない。

カルデアも最後にとんでもない疫病神と遭遇してしまったものだ。串中弔士とかいったか——彼さえ現れなければ、運命はもつと違う形をしていたのかもしれない。

「……？」

そこでコヤンスカヤは立ち止まる。

廊下の奥の暗がりから、何かが聞こえた気がしたのだ。

殺戮猟兵たちを警戒姿勢で待機させ、音の正体を見極める。これは……声、か？ 女性の声だ。聞いたことがある……これは、藤丸立香の声だ。何か喋っている？ 相手がいるのか？ いや、声は一人分しか聞こえない。独り言か？ 彼女は何と言っている——

「——素に銀と鉄——礎に石と契約の大公——」

「っ、走れ！」

殺戮猟兵に命令を下す。まさか、そんなことあり得ないと思いつつも、それでも焦らざるをえなかった。



殺戮猟兵たちが超人的なスピードで廊下を駆け抜け、独房の強化ガラスに刃を突き立てる。

殺さなければならぬ。

なぜなら、彼女は人類最後のマスターなのだから――

「――汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――！」

ガラスが砕け散ると、独房から白光が溢れ出るのは、ほぼ同時だった。

眩い光を物ともせず、次々と独房内に躍り込む殺戮猟兵。彼らとてサーヴァントが現在進行形で召喚されていることはわかっている。それより先に、マスターを殺さなければいけないことも。

それぞれの凶刃を閃かせて、柱に括り付けられている立香に刺突。

拘束衣ごとぐさぐさ貫かれる立香の体。腰に、腿に、腹に、胸に、首に、額に殺戮猟

兵の銃剣が刺さった。

立香の体は一瞬びくりと痙攣し――動かなくなる。

その後、白光が落ち着いてゆくのと同時に、刃がゆつくりと抜かれた。

神秘が消える。

奇跡が消える。

どぼつと鮮血が吹き出したのを見て、コヤンスカヤは安堵のため息をつく。どうにか

間に合ったようだ。英霊召喚は阻止できた。

「……本当、惨めでございますこと」

眼鏡の位置を直し、余裕の笑みを取り戻したコヤンスカヤは、勝ち誇った顔で言う。

「人類最後のマスターとして一度は世界を救った英雄になりながらも、心を壊され、誰よりも自分を慕ってくれた相棒を殺し、ついには人理修復の戦いをもにした者たちからも見離された。そして結末はこの通り。同情しますわ……世界の運命にその身を翻弄され続けた哀れな少女」

侮蔑の言葉を並べ立てる。驚かされた不快感を、物言わぬ死体となった立香にぶつけてやりたくなったのだ。

少女は何も言い返さない。

だが――

『ああ、確かに惨めだ。少年に狂わされ、少女を殺し、世界の運命にその身を翻弄され続けた。惨めで哀れで不幸なことこの上ない。だけど――』

誰かが言った。

再び警戒態勢に入る殺戮猟兵たちの脳天を、突如として巨大なプラス螺子が貫く。

「っ――!!?」

刮目するコヤンスカヤ。彼女の視線は独房内に現れた何者かに釘付けられる――否、

螺子込まれる。

それは黒い学ランに身を包んだ少年。

無個性を具現化したような平凡な顔立ち。

しかし彼から滲み出る雰囲気は平凡なんて概念から最も遠く。

『だけど立香ちゃん。そいつは君のせいじゃない——』

少年は笑う。

奴隷のような不敵な笑みだった。

『君は悪くない。だって、君は悪くないんだから』

第二話（仮） LOSER

0

貴兄が乾きしときには我が血を与え、

貴兄が飢えしときには我が肉を与え、

貴兄の罪は我が贖い、貴兄の咎は我が償い、

貴兄の業は我が背負い、貴兄の疚は我が請け負い、

我が誉れの全てを貴兄に献上し、

我が栄えの全てを貴兄に奉納し、

防壁として貴兄と共に歩き、

貴兄の喜びを共に喜び、貴兄の悲しみを共に悲しみ、

斥候として貴兄と共に生き、

貴兄の疲弊した折には全身でもってこれを支え、

この手は貴兄の手となり獲物を取り、

この足は貴兄の脚となり地を駆け、

この目は貴兄の目となり敵を捉え、

この全力をもつて貴兄の情欲を満たし、

この全霊をもつて貴兄に奉仕し、

貴兄のために名を捨て、貴兄のために誇りを捨て、

貴兄のために理念を捨て、

貴兄を愛し、貴兄を敬い、

貴兄以外の何も感じず、貴兄以外の何にも捕らわれず、

貴兄以外の何も望まず、貴兄以外の何もない、

ただ一言、貴兄からの言葉にのみ理由を求める、

そんな惨めで情けない、貴兄にとってまるで取るに足りない一介の下賤な奴隷になる

ことを——ここに誓います。

——闇口崩子

1

「——よりによつて球磨川君を一番槍に喚ぶとはねえ。会社も媒体も違うんだから、

登場するとしてもおまけキャラみたいな扱いになると思っていたけど。いやはや、なかなかどうして君らしい」

教壇に座る髪の長い少女は何が可笑しいのか、うすら笑みを浮かべながら言う。立香が見えているのか見えていないのか、視線をふらふらと漂わせているのだが、セリフの最後で二人の目がぴたりと合った。

「……………」、「どこですか」

「教室さ。保健室でも美術室でも理事長室でも階段の踊り場でもない」

無論、虎の道場でもないよ——と少女は付け加える。

確かに、そこは教室と呼ぶ他ない空間だった。長髪の少女は教壇に座り、立香は並べられた机の内、部屋中央の席に着席している。窓の外には無人のグラウンド。黒板の上にかかった時計を見ると時刻は四時半。影が長く、日が赤い。

「俺は死んだんですか?」

立香が訊く。

「ああ。そうだとも」

少女は頷いた。

「まあ安心したまえ——そう、安心院あんしんいんさんだけに。どうせすぐ生き返るからね。それまで暇だし、ちよいと世間話でもしようじゃないか。これまでのこととか、色々聞かせて

おくれよ」

「安心院さん、ていうんですか？」

「そうだよ。僕の名前は安心院あしむなじみ。親しみを込めて安心院さんと呼びなさい」

立香は訝しげな目つきで安心院なじみを見る。ここが本当に死者の世界ならば、彼女もまた死人なのだろうか——いや、そんなことはどうでもいい。立香の興味はそんな場所にはない。

「一つ、確認しておきたいんですけど……」

立香は周囲をきよろきよろと見渡しながら目の前の少女に尋ねる。

「何かな」

「ここに、串中くんはいないんですよね」

「いないよ」

安心院なじみはもともと上がっていた口角をさらに少し上げて言った。

やはり壊れている。

完全に狂っている。

運命の形が、決定的に変えられてしまっていた。

「あの少年にご執心のようだね」

「串中くんは俺の全てですから」

立香は照れ臭そうに言う。その瞬間だけは、ありふれた女子高生のような表情をしていた。

「串中くんは俺を捉えてくれたんです。俺をちゃんと見てくれました」

「捉えてくれた、ね」と安心院なじみは立香の言葉を繰り返す。

串中が立香に何かを与えたとすれば、それは人格だろう。彼は不定なる人類最後のマスターに形を与えた。その形は歪であり、串中にとって都合の良いように作られているが、がっちりと固められているのは確かだ。

ふふふとなじみは笑い、「マシユ・キリエライトちゃんに申し訳は立つのかい」と立香に問うた。

立香の顔から笑みが抜ける。

「なんであいつの名前が出てくるんですか」

「君ならわかるはずだろう?」

「わかりませんよ」と答える立香の表情はすでに、嫌悪と侮蔑の混じった色に染まっていた。

「彼女は君に憧れていたのだろうか? 君だって彼女に惚れてたんじゃないか。彼女への

愛はもう冷めてしまったのかい」

「あいつに惚れてた? そんなわけないでしょう、気持ち悪い」

半笑いを浮かべる立香。

「あいつは俺なんて見ていないんです。何も見ようとしないまま、理想だけを俺に投影して……俺が何者か考えもしない。そんな奴をどう好きになれと？」

安心院なじみは俯く立香を覗き込むように首を傾げる。立香は不愉快そうになじみを睨み、また視線を背けて言った。

「あいつは一度として、名前で俺を呼んでくれなかった」

## 2

少年の武器は螺子。

それも剣やナイフのように長く、巨大な螺子だ。両手にそれぞれ一つずつ、螺子の頭を掴んで構え、コヤンスカヤに相對する。一方コヤンスカヤは小口径の拳銃のみを武装とし、学ランの少年に照準を合わせてすぐ発砲する。ただの銃と侮るなかれ、コヤンスカヤ特製の術式を組み込んだ銃弾を搭載しており、急所を貫けばサーヴァントといえども絶命させる。少年は銃口を向けられてすぐ左右にステップを踏んだが、コヤンスカヤの狙いは正確だった。立て続けに放たれた三発の弾丸は全て少年の体にヒットする。少年はノックバックし、どさりと廊下に倒れ伏した。

だが、彼が螺子を手放すことはなかった。

『ひどいなあ』

少年はぐったりとゾンビのように起き上がる。だくだくと肩や腹から血を流しながらも行動を停止することはなく、コヤンスカヤへ向かって再度行進を開始する。

『アグレッツシヴなお姉さんだ。出会って5秒で発砲なんて。こちら学園シニールギャグ出身だぜ？ もっと世界観をすり寄せてくれてもいいってもんだろ』

「……」

なぜだ。なぜ動ける。

この銃弾を撃ち込まれたら部分的に霊基が破壊される。そういう術式を組んだのだから当然だ。それを三発も入れた。三発も撃ち込めばサーヴァントの霊基はぐちゃぐちゃに破壊できる。なのになぜ、どうして消滅が始まらない？

まず疑ったのは幻術・幻覚の類이었다。コヤンスカヤが少年を撃ち抜いたと思ったのは錯覚で、実はあらぬ方向に銃口を向けていたという可能性。

だが、いくら幻術破りを試みても効果がない。そもそもコヤンスカヤをそこまで綺麗に幻術へ落とせるだろうか？ どうにも納得いかなかった。

少年が飛び込んでくる。両手に持った螺子をコヤンスカヤへ突き立てんと迫る。コヤンスカヤは後ろに飛び退くと、なおも追撃せんと近寄ってくる少年の首に、手刀を思

い切り突き刺した。

『つ——!』

血が噴水のようにわき出る。天井まで届く鮮血を浴びながらも、コヤンスカヤは油断せず、再び銃を構えて少年の心臓部に二発弾丸を撃ち込んだ。

サーヴァントの心臓部には霊基の核がある。これを破壊されればどんなサーヴァントでも身体を保っていられない。たとえ尋常ならざる継戦能力を誇るクー・フリーンだろうがスパルタクスだろうがその例外には至らない。消滅までの時間、油断はできないが、この少年がいかなる能力を持つていようとも、ここからの復活はありえない——  
 そう、ありえない。

そんな現実の間違っている。

だが——しかし。

『ああ、そうそう。これだよ! この距離感』

「な——!?!」

現実には愚か、夢も幻想も運命も、およそ考えうるほぼ全てを間違えた存在こそがこの少年、

混沌よりも這い寄る過負荷——マイナス球磨川くまがわみせき襖である。

『学園ラブコメ出身の僕にとって、年上のお姉さんとはこれくらいの距離で話さない』

落ち着かないぜ』

コヤンスカヤは全力で退避しようと試みるが、間に合わない。

螺子込まれる。

「ぐう——っ!？」

床に押し倒され、ぐりぐりと両肩を螺子で廊下に縫い付けられる。久しく覚えのない激痛がコヤンスカヤを襲った。まずい、捕縛された——早く、早く脱出しなければ。もがくがすぐには抜けない。追加で二本、手のひらに螺子をもらつた。「づっ」という呻きが漏れる。

このままではやられる。

焼けるような痛みに意識を持っていかれそうになりながら、コヤンスカヤは戦況をそう判断した。どうする、どうすれば生き残れる——

『ブックメーカー却本作り』

そこに、トドメの一撃。

腹部に打ちつけられる、ひときわ鋭く大きなマイナス螺子。それが刺さつた瞬間、コヤンスカヤの体からあらゆる力が抜けていく。膂力も、魔力も、貯め込んだエネルギーの全てが雲散霧消してしまった。髪から色が抜ける。白くなる。「な、何を——」なんだ、何が起こつた。

勝利が遠のく。

コヤンスカヤの味わった感覚を端的に言い表すとすれば、それが適切だった。勝ちという概念がみるみる離れていく。たとえどんな相手が来ようとも勝てない——世界の全てがコヤンスカヤを否定するような、そんな気分<sup>に</sup>苛まれる。起死回生の策も練れない。勝ちの絵を描けなくなってしまった。

立てない。

「なんで……私、私は……」

勝てない。

敗者としての自分しか、思い描けない。

『反撃は無しかな？　ならこの勝負、僕の勝ちつてことになるんだけど——』

球磨川はコヤンスカヤに注意を払いながら、キョロキョロと辺りを見渡す。

増援は？

伏兵は？

何かこの状況をひっくり返される要因はないか？

だが、いくら待っても事態に変化は起こらない。不思議に思った球磨川は敢えて気を抜き、コヤンスカヤに逃走のチャンスを与えてみるが、彼女は立ち上がることできなそうだった。「却本作り」<sup>ブックメーカー</sup>をまともにくらったのだから当然と言えば当然だが、しかし

妙だ。

このままでは、球磨川禊が勝ってしまう。

おかしい。球磨川にとって、勝利とはこんな簡単に手に入るものではない。彼にとつての勝利はこんなに軽いものではないのだ。サーヴァントだから、今の球磨川は普通の人間ではないから、という理屈も通用しない。なぜつて、「却本作り」の効果はこれ以上なく十全に発揮されているのだから。

相手の全てを球磨川の同格へと墮とす、過負荷<sup>マイナス</sup>。

もしサーヴァント化するにあたって球磨川が中途半端に強化されるか、「勝てない」逸話を再現しきれなかったのだとすれば、このスキルはこれほどの破壊力を持たない。却本作りは球磨川禊の弱さあつてのものなのだ。

じゃあなんでこんな簡単に勝ててしまうんだ——

「どうしたんですか?」

不意に、球磨川に声をかける者がいた。

新手か、やはり勝利はまだ遠いのか——と臨戦態勢に入つて後ろを振り返つた球磨川は、しかし構えかけた螺子をすぐにおろす。そして笑つた。そうだ、忘れていた。彼女を蘇らせたのは僕だったじゃないか。

『なんでもないよ』

砕け散ったガラスの上に立つ少女——藤丸立香に向かつて、球磨川は笑いかけた。

拘束衣から解放された彼女は、足が血塗れになるのも気にせず、素足のままガラスの上を歩き、割れた窓から廊下に出てくる。

「そうですか？　なにか気になつてゐたみたいでしたけど」

『ちよつと腑に落ちなくてさ。初登場補正があるとはいえ、こんな簡単に勝てちゃうのが不思議でね』

「なぜ？」

立香は首を傾げる。本気でわからないようだった——確かに球磨川の人となりを知らなければ、この疑問は理解しがたいだろう。説明すべきか？　球磨川は一瞬考える。そして説明すべきだと結論づけた。今後、自分を戦力として扱うのなら、彼女は知らなければならぬだろう——球磨川禊という存在の核心を。

そう思つて球磨川が口を開きかけるより一瞬早く、立香が二の句を継ぐ。

「あなたのマスターは、俺なんですよ？」

球磨川は沈黙した。

その言葉を聞いた瞬間、気づく。相手のことを理解していないのは球磨川の方だったと。

彼女とよく似た存在を球磨川は二人知っている。一人は球磨川が唯一勝利をもぎ

取った相手であり、最大の好敵手。そしてもう一人は五千年前の英雄——あの全知全能の悪平等をして、一億回以上の敗北を味合わせた超人。

この少女はあの二人と同じ——いや、多分あれ以上だ。

球磨川は確信する。

勝ててしまうわけだ——藤丸立香の圧倒的な力の前では、たかが球磨川の負け癖ごと  
き、無いも同然。彼女のもとにいる限り、球磨川禊は敗北の枷に一切捉われない状態で  
戦える。

勝者であることを宿命づけられた存在。

なんて都合の良い。

なんて——おぞましい。

球磨川は笑う。

その笑みには、一種の諦念のような何かが宿っていた。

『これからどうする、立香ちゃん』

「んー。寒いし、あなたの視線もキモいですし、とりあえず着るものが欲しいですね。上  
に行きましよう。生活区に入れば何かあるでしょうから」

全ての出入り口を封鎖され、対抗するための兵力も尽きたカルデアに残された唯一の希望路は、立香の収監されていた独房のある棟とは反対の棟の最深部に隠されている、一輛の車だった。

名を、虚数潜航艇シャドウ・ボーダー。

レオナルド・ダ・ヴィンチが設計したこの大型車両は、アトラス院製の虚数観測機「ペーパームーン」が搭載されており、その名の通り虚数世界への潜航を可能とする逸品である。

カルデアの職員はみなこの車輛を目指す。殺戮猟兵に追われながら、この車に乗り込むことだけが生き残る道であると信じて建物の下層へと降りてきていた。

自身の工房を出たレオナルドもまた下層を目指す。時折遭遇する「黒い兵士」に邪魔されながらも撃破し、他の職員たちを先に逃がしながら、下へ下へとフロアを降りていった。

ホームズは先に行かせていた。万が一を考えて、シャドウ・ボーダーの守りを任せただの。

敵の主力たる黒い兵士は一体一体が強く、徒党を組まれるとサーヴァントであるレオナルドでも簡単には勝てない。だが、敵はどうやら職員の掃討に作戦目標を移している

らしく、兵力を分散している。まとまった集団には出会さなかった。それはレオナルドにとつて幸運ではあったが、一概にラツキーと済ませることもできなかった。敵が分散している事実は、全ての職員たちを守り切れないことを示す。

加えて、敵は黒い兵士だけではない。彼らとは明らかに一線を画す実力者も紛れていた。

レオナルドの前に立ちはだかつたのは、そんな者たち。

「キャスター：レオナルド・ダ・ヴィンチだな」

「キャスター：レオナルド・ダ・ヴィンチだな」

二重音声。

ハウリングするように響くその声は、レオナルドと相對する二人の人物から出たもので。

どちらがどちらかは、レオナルドにはわからなかった。

「君たちは……」

レオナルドは自身の籠手と杖に意識を向けつつ、二人との距離を取る。見たところ、彼女たちに遠距離の武装はなかった。いや、もしかするとその法衣の下に暗器を隠しているのかもしれないが、少なくとも見かけ上は、徒手空拳を主体とする戦士のようなだった。

「《十三会談》の第三席——みおつくしたかみ 濔標高海、推参」

「《十三会談》の第四席——みおつくしみそら 濔標深空、推参」

彼女たちは名乗りをあげる。

レオナルドにとって、聞き覚えのある名前だった。

「濔標姉妹……」

双子の殺し屋。

十年以上前から活動の記録が見え隠れする、裏世界の住人。

そして「十三会談」と名乗る勢力の構成員。

カルデアの敵だった。

「そうか……やはり君たちが今回の主犯だったんだね」

「違う」

「違う」

二重で否定されるレオナルド。

「こんなのは狐さんのやり口じゃない。私たちはただ、混乱に乗じて忍び込んだだけだ」

「こんなのは狐さんのやり口じゃない。私たちはただ、混乱に乗じて忍び込んだだけだ」

「……じゃあ、何かな。火事場泥棒ってわけかい」

レオナルドは皮肉に笑う。濔標姉妹は、つまらなそうな表情をして「そんなところだ」

「そんなところだ」と二重で答えた。

「何が目的だ? 残念ながら、この施設にあったお宝はもうあらかたどっかに行っちゃったけど」

表面上は余裕を取り繕いながら、レオナルドは、濡標姉妹が果たして本当のことを言っているのだろうか、本当だったとしたら何でカルデアがこんな目に遭っているのかを高速で検討する。敵対勢力が別にいる? Aチームのコフィンが空だったことに関係はあるか? あの神父とコヤンスカヤは何者だ? ゴルドルフはただ踊らされただけか? カルデアは今後、誰とどう戦えば良い?

「敵に目的を教えるわけがないだろう」

「敵に目的を教えるわけがないだろう」

揃って答える濡標姉妹。だが言葉に反して視線は雄弁だった。彼女たちの注意が一瞬、レオナルドの持っている小型のトランクケースに向けられる。なるほど、狙いはこれか——と、レオナルドは納得した。

これには、カルデアに召喚されたサーヴァントたちの霊基情報が詰まっている。

これ以上の価値を持つ物は、現状のカルデアには存在しない。

「……残念だけど、君たちを野放ししておくわけにはいかないんだ。あまり時間もないし、ここで倒れてもらうよ」

「誰に向かつて言っている。聞いていなかったか？ 私は《十三会谈》の第三席——」  
 「誰に向かつて言っている。聞いていなかったか？ 私は《十三会谈》の第四席——」

——濔標高深海空だ、と。

二人の名乗りが重なった直後、レオナルドの目前に二つの掌が迫る。

「つ——」

レオナルドは後退の姿勢に入るが、間に合わない。気づいた時には、濔標姉妹はすでに間合いの内に入り込んでいた。だが、なぜだ。レオナルドはずっと二人を注視していた。瞬きすらしていないのに——意識の間隙を縫って踏み込まれたのか？ まるで空間が省略されたようだった。

とにかく、まずい。

この距離は。

技が、決まってしまう。

「腥羶——」

「扇歌——」

「歓娯——」

「展勝——」

レオナルドは咄嗟に防御姿勢を取る。しかし濔標姉妹の技術の前には大した意味を

持たない。万能の天才にして芸術家レオナルド・ダ・ヴィンチにしても、マーシャルアーツは専門外だった。万能の名に恥じず、遠中近全対応を謡ってはいるが、中距離戦、遠距離戦の攻防と比べると、至近距离での戦闘への造詣は幾分浅い。

「神秘を纏った攻撃しか効かない」というサーヴァント特有の防御システムも、ここでは役に立たなかった。年代物の武器に破魔のご利益が宿るのと同様、世代を超えて練り上げられた武芸にも神秘が宿る。

「人食い<sup>マンイーター</sup>」や「人間失格」との戦闘から十年と少し。

濡標姉妹の腕前は、その領域に達していた。

遠距離戦では間違いなくレオナルドが勝つ。

中距離戦でも危なげなくレオナルドが勝つ。

近距离でもレオナルド有利。

刀剣の間合いよりも狭い超至近距离のみで、濡標姉妹に分があり——そして今は、まさにそんな状況だった。

レオナルドが吹っ飛ばされる。

右肩と左脇腹に巨大な衝撃。後方へ吹き飛ばされたレオナルドは、しかし宙を舞う只中で反撃を繰り出した。

杖から発射される光線。闇雲にばらまかれたように見えるそれは、実のところ全て弱

性のホーミングが付与されている。狙いは精確。発射されてから反応しては到底避けられないそれを、濔標姉妹はたやすく躲して廊下の左右に広がった。予測できる反撃だったらしい。まあレオナルドとしても当たるとは思っていないかった。追撃を遅らせる牽制だ。

「堯舜——」  
ぎょうしゆん

「凜威——」  
りんい

「箕獸——」  
みのしし

「華柄——」  
かがら

「舞霧——」  
まいぎり

「白華——」  
はつか

再び流れるように距離を詰める濔標姉妹。今度は先ほどよりも二人の迫ってくる角度が広い。どちらかに対処しようとすれば、どちらかが視界から外れてしまう。

レオナルドは右の籠手から炎を噴出して目の前に壁を作る——が、一步遅い。右から来る方（高海か深空かはわからない）は火を嫌って踏みとどまったが、左から来る掌底は、またも直にもらってしまう。

ずしん、と、世界が揺れた。

レオナルドの身体を衝撃が突き抜ける。「うっ——」とうめき声が口から漏れた。

サーヴァントとしてのレオナルドの耐久度はE。常人よりは多少タフで、通常ならこの一撃をもらつた時点で勝負アリなのを継続できている点で頑丈だが、こればかりに頼りきるには心許ない。

杖を振り回し、相手に距離を取らせる——が、驚いたことに杖のスイングを上半身の動きだけで躲され、さらに隙を晒す結果となつた。ドンつと身体を当てられる。体勢が崩れ、床に転がるレオナルド。杖が投げ出された。

「黄蛟きみずち」

「大篝おおかがり」

「劍牛けんぎゅう」

「社貫やしろぬき」

「誅風ちゅうふう」

「遍鬼へんき」

それを見逃す濔標姉妹ではない。一気にトドメを見舞うべく襲いかかる。レオナルドは霊基トランクを左手に持ち帰ると右の籠手に再び魔力を装填、飛びかかつてくる姉妹の片割れに火炎を発射した。

しかし、それすらも濔標姉妹には通じない——というか、やはり距離が近すぎる。

レオナルドの籠手に仕込まれた通常の武装は火炎放射の他に冷氣放射、ロケットパン

チの三種。至近距離での高速戦闘に持ち込まれては、満足に威力を発揮できない。火炎も冷気も、吐き出す前に照準をずらされる。範囲攻撃として優秀な武装も、ゼロ距離では攻撃範囲が広がる前に対処されてしまう。潯標姉妹は矢継ぎ早に連撃を叩き込み、レオナルドの体力を削っていく。

距離だ、距離が必要だ。

サーヴァントとしての身体能力と、即席の強化魔術を駆使してレオナルドが飛び退くが——潯標姉妹は驚いたことに、レオナルドに追隨してきた。

レオナルドは直接戦闘型のサーヴァントではない上に、今は明確なマスター不在であり、満足なパフォーマンスは発揮できないが、それでも敏捷性のランクはCを保っている。サーヴァントとしては平均レベルの速度を持っているのだ。サーヴァントとして平均レベルとは、つまり一般人からはかけ離れた動きで走り回れるという意味なのだが——しかし、引き剥がせない。レオナルドの反撃を警戒しているため、彼女たちが無闇に飛び込むことはないが、レオナルドの得意な距離には持ち込ませてくれない。

これが屋外なら拮抗状態になるのだろうが、生憎カルデアの廊下には限りがある。いつかは追い詰められて、仕留められるだろう。

次の一発を食らえばいよいよ足が止まる。

切り札を切るのに、もはや躊躇いなどなかった。

「東方の三博士……北欧の主神、知恵の果实——」

「羅織らおり——」

「絵扇えおうぎ——」

レオナルドが詠唱を始めたのを受けて、濔標姉妹も勝負を決めるべく大技の予備動作に入る。

「田鶉たうすめ——」

「蛇籠じやかご——」

先ほどとはまた違う、完璧に左右対称の強襲。武芸の素人が看破するのはまず不可能。否、たとえ達人の域にいる者でもいなせるのはごくわずかの、文字通りの必殺技。

「八咫やあた——」

「墮獄だじく——」

しかし現在、濔標姉妹の向こうに回るのは人ならざる英霊にして、埒外の天才と語り継がれる究極の芸術家。

「我が叡智、我が万能は、あらゆる叡智を凌駕する——」

その伝説に不可能はなく——

その宝具に、死角は無い。

「『万能ウオモウニツの——ッ!?!』」

魔拳に匹敵する滯標姉妹の奥義と、レオナルドの宝具が衝突する、その寸前。

両者の意識が対象のみに絞られ、

周囲への対応能力がゼロになる瞬間――

刹那。

狙い澄まされた一撃が、レオナルドの背中から、胸部を突き抜けた。

「――がフツ、……!?!」

不発に終わる宝具。

なんだ――

状況への理解が追いつくよりも早く、

滯標姉妹の拳打が、レオナルドの体に入る。

破壊。

破壊される。

鎖骨の下が、肉体が、霊核が、碎かれる。

敗北が、

消滅が、確定する。

レオナルドの視界にある、滯標姉妹の表情。

彼女たちの表情は、驚愕の色に染まり、

技が決まったのにもかかわらず、戦慄していて、  
奥。

レオナルドの背後に、視線が向けられていた。

「運がなかったな、レオナルド・ダ・ヴィンチ」

背後から聞こえる声。

聞き覚えのある低音。

それを聞いて、

レオナルドは全てを理解した。

「——君の望みは、何一つ叶わない」

言峰綺礼はレオナルドの胸部から右腕をずぼりと抜く。

勢いそのまま、レオナルドを押し飛ばし、濡標の片割れにぶつける。

血塗れの腕——退避しようとするもう片方の濡標へ接近。

初撃はガードされる。二段目、三段目の追撃もいなされる。

しかしその後には控える本命の蹴りは、少なくとも彼女一人だけでは、防げなかった。

首が碎ける。

技をくらう前、彼女の表情は焦燥と苦悶に覆われていて、



油断無く周囲を見渡す言峰。

しかしいつまで経っても攻撃はなかった。

それでも言峰はしばらく警戒を解かずにいたが——周囲の殺気が完全に消えていることを確認し、少なくとも防御姿勢を解除する。

濡標深空の姿は、もうどこにもなかった。同様に濡標高海も幻のように消えていた。敵は撤退したらしい。

「……成る程。姿の見えない支援役がもう一人いた、ということか」

言峰は呟いた。

撤退の判断を下したのはその者だろう。あの状態の深空にそれができるわけがない。感情的にも、技術的にも。まあ、逃げられたのなら仕方ない。まだ近くにはいるだろうが、追撃はしなくとも良いだろう。彼らがまだカルデアと「我々」の戦いに横槍を入れてくる気であるのなら、いずれまた相見えることになる。

今は当初の目的だ。

意識を切り替えた言峰は、床に倒れ伏すレオナルドの方を見る。

高海の死体まで回収していった手際は見事だが——本命の得物は、どうやら持ち出せなかったらしい。

ヒューっ、ヒューっど、不気味な呼吸音をさせながら、レオナルドは眼球を動かして

どうにか言峰を見上げる。彼女は杖も籠手も投げ出していたが、その代わりに、空いた両手で小型のトランクを抱きしめていた。

「サーヴァントの霊基情報が入っている器はそれか？」

いまだ敵意の籠もった目で言峰を睨むレオナルドに問う。

答えはなかったが、それは肯定と同義だった。

「君たちにそれを持っていられると少々困るのでね。渡してもらおう」

「……」

レオナルドは霞む視界の中、薄い笑みを浮かべてこちらを見下ろす言峰を睨み続ける。

黙って奪えばいいのに、と、音の出ない喉で毒づいた。

言峰はレオナルドに抵抗の余力がないことを知って話しかけている。趣味の悪い男だ。レオナルドに取れる選択肢が一つしかないことをわかっていて、いつまでそれを選び続けられるか、レオナルドがいつまで耐えられるかを試しているのだ。

レオナルドの体から黄色い光が漏れ始める。霊基の崩壊が始まった。

ここまでか。

すまない、ホームズ。霊基トランクは届けられない。

沈みゆくレオナルドの意識——ぼやけた思考で辿るのは、カルデアで起きたこここれま

でのこと。そしてここで出会った人々の顔。

マリスビリー・アニメスフィアとその娘、オルガマリー。

レフ・ライノール。

職員たち。

キリシユタリアをはじめとするAチームの面々。

マシユ・キリエライト。

シャーロック・ホームズ。

人理修復のために集った数多のサーヴァントたち。

ロマニ・アーキマン。

そして――

「……？」

ふと、レオナルドは言峰綺礼の視線が自身に向けられていないことに気づく。

彼は廊下の先を見ていた――先ほど滯標姉妹が立ち塞がっていた方向とは逆側。

こつん、こつん、と、足音がする。

誰だ。生き残った職員たちは全員先へ行かせた。ホームズにはシャドウ・ボーダーの護衛を任せている。だからあつちの方向から来る者がいるとすれば、それは全て敵陣営の人間だ。

味方のはずがない。

敵だ。

……たとえ君でも、敵なんだ。

とうの昔に、私は君を見限っているし、見捨てている。

——嗚呼、だけど、それでも。

泣いてしまいそうになるのは何故だろう。

白いカルデアの制服を纏う、赤毛の少女。

藤丸立香。

## 4

「コヤンスカヤは失敗したか」

言峰が呟く。

「——ここは『まさか』と驚くべきなのだろうが、何故かな。『やはり』と言いたくなってしまう。君はそれほど……巨大な存在だ」彼の口角が上り上がった。

「誰ですか貴方」立香も笑う。

「胡散臭いですね。貴方みたいな人に褒められると死にたくなっちゃいます」

彼女は悠然とまわりを見渡し、最終的にレオナルドに視点を向ける。死にかけのレオナルドを見て、「ははあ」と納得したようにうなずいた。状況を把握したらしい。

「——球磨川さん、時間稼ぎしろって言ったら、どれくらい保たせられます?」

そう言った瞬間、言峰綺礼が飛び退く。

一瞬前まで言峰の立っていた位置に、数本の巨大なプラス螺子が突き刺さっていた。

ゆらりと立香の前に現れる影。

詰襟の制服を着た、特徴のない少年。

『時間を稼ぐのはいいが——別にあれを倒してしまっても構わんのだろう?』

「かっこつけてないで、どれくらい保つか教えてください」

『立香ちゃんの方に行かせないようにするの? そうだね、せいぜい一分ぐらいじゃな

いかな』

「だっさ」

呆れ顔になる立香。「じゃあ、まあ頑張つて一分もたせてくださいね。よろしくお願

いしますよ」

『了解、立香ちゃん』

「できればマスターと呼んでください」

立香が言う、球磨川は螺子を構えて言峰に突っ込む。球磨川の螺子は苦もなく言峰

に躲され、反撃の膝蹴りが球磨川の腹に入り、あえなく吹っ飛ぶ——しかしその間に、言峰・球磨川と立香・レオナルドを隔てる螺子の鉄柵が構築された。

「……」

廊下の床、壁、天井にこれでもかと打ち付けられた螺子の群れ。言峰にしても簡単に突破できるような代物ではない——特に、球磨川という妨害役をあしらいながらの突破ならば。

確かに一分はかかる。

冷静に判断を下した言峰は、球磨川との戦闘を開始した。

一方の立香は、レオナルドに近づいて彼女の傷の具合を確かめる。

「——うわあ、胸をえぐられてるんすね。じゃあ発声は無理か」

一目見てそう言った立香は「一方的に喋るんで、聞いてください」と前置きをして、言葉が続ける。

「あなたを許してあげます」

立香はにつこりと微笑んだ。

「俺を独房に入れたこと、処分を計画していたこと——は、どうでも良いんです。あなたの犯した一番の罪は、串中くんに武器を向けたこと。本当なら二千年ほど拷問を受けてもらいたいのですが、まあ、特別です。串中くんは無傷のまま帰れたようですし、これ

までのあなたとの関係とか成果とか、なんか諸々考慮して、水に流してあげましょう。寛大ですよね？ 泣いて感謝してもいいんですよ」

表情だけは昔の立香のまま、「契約を結びましょう」と言う。

「あなたが後生大事に抱えているそのトランク……それを、目的地まで運んで差し上げます。この奥ですよ？ 脱出手段……虚数潜航艇シャドウ・ボーダー、ですか。そこまで持つていつてあげましょう」

駄目ですよー、時間がないとはいえ、すぐに崩壊する施設とはいえ、こういうデータはちゃんと工房から消去しとかなないと。と、付け足して言う。

「ああ、でも『大嘘憑き』には消去とか無意味かー」

楽しみに、優しげに、立香の微笑みは変わらない。

「ねえ、ダ・ヴィンチちゃん——俺の奴隷になってくれませんか？」

そんな言葉を言い放つ時も。

立香は立香のままだった。

「ただ技術と知識だけを搭載した俺の傀儡になってください。俺だけを見て、俺だけを愛し、俺に打ち捨てられるその時までずっと俺に尽くし続けてください」

ふざけるな、そんな契約に乗るわけがない。

レオナルドは立香を睨む。だが立香の舌は止まらず、「さもなくば、俺はその神父さ

んと一緒にシヤドウ・ボーダーを潰します」などのたまう。

「今後あらゆる手段を用いてカルデアを殲滅します。全力でね」

やめろ。

やめてくれ。

抗議の声をあげようとするが、レオナルドの声帯はもう機能していなかった。「ひゅーっ、ひゅーっ」という音が胸の穴から鳴るだけで、何も言い返せない。

惨めだった。

無力だった。

レオナルドには、何もできない。

「よろしいですね？ では、良いお返事を期待しています」

立香はレオナルドからトランクをひったくる。レオナルドは最期の力を振り絞って抵抗するが、もはや崩壊の始まっている身体だ、簡単に奪われてしまう。

待て、待ってくれ。駄目だ、そっちに行くな——どうする、残された時間はあと数秒。どうすれば良い。

「……………」

レオナルドは、そう言った。

「……………」

立香は無言のまま、しばらくレオナルドを見つめる。

「……なんで」

ポツリと眩き、俯く。

「なんでだよ」

レオナルドは魔術を行使し、声帯に空気を通して強引に発声したのだ——そんなことは立香にもわかる。かの天才ならその程度、こんなボロ雑巾みたいな状態でもやってのけるだろう。問題はそれを使って発した言葉だ。恨み言は予想していた。泣き言を言うかもしれないとも思っていた。考え直せと迫ってくる可能性も。だが、なんだ？ おい、なんの冗談だ。魔術を使ってまで伝えたかったのが、謝罪の言葉？

立香は再び顔を上げる。

その表情は怒りに染まっていた——が、それは一瞬のことで、怒りの色はすつと抜け落ちる。

「許すって言ったでしょう」

慈愛に満ちた微笑みを浮かべる立香。

その顔のまま、片足をゆつくりとあげて——もともと霊基崩壊寸前になっているレオナルドの頭を踏み潰した。

ぐしやりと。

レオナルドの肉体がとうとう霧散する。

神秘的な黄色い光の粒が弾け、何の形跡もなくなった。

「——随分と意地悪なことをするのだな」

立香の背後に、言峰綺礼。

廊下を分断していた螺子の群れはどれもこれも折れ曲がり、両断され、砕け散つていった。

球磨川は奥の方で血塗れになって斃れている。彼のことだ、どうせまた何事もなかったかのように立ち上がるのだろうか、それには今少しの時間を必要としていた。

そしてその「今少しの時間」内に、言峰は立香を三百回ほど殺せる。

トランクを奪うなど、造作もない。

「あなたがそれを言いますか」

立香は言い返した。

言峰も立香も、双方不敵な笑みを浮かべている。

「君の今の状態は、性質の反転とも違うな。黒化英雄は生来と真逆の人格を持つが、それゆえに整然とした同一性を維持している。しかし君の場合は『反転』ではない。なんと言えば良いのか——そう」

「『歪曲』、でしよう」

立香が言葉を引き継ぐ。「自分でもわかっていますよ。前の俺を知っている人から見たら、今の俺はきつと壊れている。行儀の良い改造や変換なんかじゃありません。これはただの破壊です」立香は恍惚となり、頬に片手を当てた。「串中くんは、俺をめちゃくちゃにしてくれました」

「串中弔士は、ただただ無造作に君を壊した……その理由を、君は知っているのかね？」  
「……困われているから」

立香はそう答える。

「外の世界を見たいと願うのは、人として当然ではありませんか？」  
「……そうだな。全く以てその通りだ」

問答を終えると、立香はトランクを地面に置いて両手を広げ、目を瞑る。

「では、ダ・ヴィンチちゃんの答えを聞きましよう。俺をあなたに殺させなければよし。あなたが俺を殺したら悪し。シンプルな二択です」

「君が死ねば、我々の陣営に入ることとはできなくなるが」

「大丈夫です。どうせすぐ生き返るので。このトランクを奪い取って先に行ってくださいよ、あとで追いつきますから」

「……そうかね」

では——と。

言峰は拳を握って立香へ踏み込む。狙うは壇中——胸の真ん中。言峰の拳打が撃ち込まれれば、立香の肉体は見るも無残に爆散するだろう。

その一撃は、はたして。

立香に届くことはなかった。

「——『ウオモ、ウニツエルサレ万能の人』——」

レオナルド・ダ・ヴィンチの宝具は長らく攻撃手段の一つとして使用されてきたが、実はその機能の本質は「解析」にあり、防衛においてこそ真価を発揮する。リソースの一部をカルデアの運営に割く必要もなくなったとするのならば、レオナルドに仕掛けられるあらゆる攻撃は一瞬のうちに「解析」され、「転用」され、「反射」される——それは純然たる武術である言峰綺礼の八極拳にしても例外ではなく。

鏡のように。

言峰の拳は、霊基トランクから臨時再召喚されたレオナルドの籠手と激突し、跳ね返された。

言峰は笑う。

立香も笑い。

レオナルドだけが、笑っていないかった。

彼女の表情に一切の感情は無く。

だが何故だか、泣いているように見えた。

「良い子だ、ダ・ヴィンチちゃん」

立香が褒める。レオナルドは「光栄です」と、機械のように応える。

そして立香の方を振り返り、片膝をついて傳いた。

「壊れた魔術師、レオナルド・ダ・ヴィンチ、参上仕りました——どうぞ気の向くまま、

お気に召すまま使ってください。私は、あなたの奴隷サーヴァントです」

頭を垂れてそう名乗るレオナルドは、みかけこそいつものモナリザであり、いつもの「ダ・ヴィンチちゃん」であつたが、その中身は、特異な契約によつて醜く変えられていた。

立香と同様、壊れていた。

ごめんよ。立香くん。

やっぱり、私じゃ君を救えない——

## 5

目が開く。

見知らぬ天井を仰ぎ見るより前に、自身の顔を覗き込む女性の顔を見てしまう。彼女

はこちらを見ながら、にこりともしないまま「起きましたか」と呟き、「今がいつだかわかりますか？」と訊いてきた。

「え……」

自身の喉から声が漏れる。意識はまだ覚醒しきれていない。ただ訊かれたことに答えようと、知っている限りの「今」の情報を思い起こす。

「2017年……12月……」

「はい、ありがとうございます」

正確な日付を聞くより先に遮り、合っているとも間違っているとも言わず、女性は何事かを手元のタブレット端末に入力する。今ので何がわかるのだろう。自身の健康状態だろうか。次第に頭が冴えてきて、現状を把握し始める。ここは……病室？ 寝かされてるのはベッドで、この女性は、だとすれば医者か何かか？

「あの……ここは……？」

「ここはヒューストンです」

女性は素つ気なく回答する。ヒューストン。ということとは、ここはアメリカ？ 確かに、彼女の言葉は典型的なアメリカ英語だ。

「あなたのお名前をお聞かせ願えますか」

質問はターン制とばかりに、今度は女性の方が尋ねてくる。人に名前を聞く時はまず

自分から名乗るものじゃないのですかなどとは思っても口にはできない夕子で、素直に答えた。

「……マシユ・キリエライト……だと、思います」